

観光行動の移動パターンの類型から考察する 広域観光周遊ルートについて

国際観光学研究科国際観光学専攻博士後期課程1年

羽田 利久

1. 目的と背景

本稿は、2015年から2016年にかけて、観光庁が認定した「広域観光周遊ルート」について、これまでの観光ルートの先行研究を元に観光ルートの分類を行い、訪日外国人観光客に対して策定した観光ルートにみられる傾向を明らかにすることを目的とする。そして、今回の検証によって、より効果的なルート策定の条件について考察を行いたい。

観光を一連の行動として捉えた場合、起点と目的地、そして終点が存在すると言える。鈴木ら(1984)では「観光は日常性を脱出して、非日常性の空間にでかけ、また、其の生活の拠点にもどることで、その回の観光は終結する」¹とある。また、加太(2008)では「観光とは、近代市民社会の定住者が、一時的に離郷し、有償を前提にして気軽に楽しむために、他郷の風物を観に行き短期間滞在をする現象に関わることどもの総体である」²としている。そして、岡本(2013)でも「人々が日常生活圏を一時的に離れ、どこかへ旅行してまた帰ってくるという実態が認められる」³とある。つまり、観光客が居住地を出発し、観光対象とする目的地まで移動し、再び居住地に戻る一連の行動が観光と言える。そしてその目的地は単一の場合もあれば、複数存在する場合もあり、それは観光客がその一回の観光旅行に対して求めるものによって変化している。

新たな国づくりに向けて「明日の日本を支える観光ビジョン」が策定されているように、近年観光による経済効果は多いに期待されている。それは今回の目的のように観光庁が訪日外国人観光客を地方に誘客する手段として「広域観光周遊ルート」を策定するところにも表れている。地域に観光客を誘導し、人や金の流れを導くための施策の一つとして、筆者は観光ルートの策定があると考えている。

そしてこの観光ルートについて検討する際に、筆者は店舗における消費行動について研究を行っているインスタ・マーチャンドアイジングの理論を参考にしたいと考えている。インスタ・マーチャンドアイジングとは、田島(1989)によれば、「小売店頭で、市場の要求に合致

した商品および商品構成を、最も効果的で効率的な方法によって、消費者に提示することにより、資本と労働の生産性を最大化しようとする活動」⁴を意味している。インスタ・マーチャングは、長期的な視点から売場生産性を高める“スペース・マネジメント”と、短期的な売り上げ増加を狙いとした“インスタ・プロモーション”に分類され⁵、その中でも売り場の構成をマネジメントすることにより売上、利益の最大化を図る“スペース・マネジメント”は、店舗内における消費者の行動を考えるものである。前田（2015）では「観光行動を“非日常生活における消費行動”」⁶とし、さらに「観光者は消費者のひとつの側面であり、観光行動は消費行動のひとつの形態として把握することができる」⁷としている。観光ルートを移動する旅行者の行動は消費者のそれと類するものであり、その行動について検討する際にも、参考となると考えるものである。

そのため、本稿においては、観光ルートについてインスタ・マーチャングの理論を用いて考えるための準備段階として、観光ルートの分類について、先行研究を元に考察する。そして観光ルートの具体的事例として観光庁が認定をした広域観光周遊ルートのモデルコースを取り上げ、これらのモデルコースが分類上どの分野にあたるのかを検証する。このことにより、観光コースの分類についてより具体性を高めたいと考える。この結果を元に、観光ルートについてインスタ・マーチャングの理論を利用する際の検討材料の一つとしたい。

2. 先行研究

橋本(2013)によれば、「観光対象にいかなる順番で立ち寄り、それらをいかにして印象深くつなぐことができるかを検討することが、トータルとして観光者の体験の質を高めるために肝要となる」⁸とあり、観光ルートを類型化し分析することは、観光者へ提示するルートを検討する際に重要な観点となり得る。そして、観光者の体験の質を高めることは観光者の満足度を高めることになり、その満足度の向上が消費を促すことにより、結果的に観光による経済効果の向上に繋がると考える。

観光においてどのような行程をたどるか、またその要因はどこにあるのか、という事については、観光行動としてこれまでに多くの研究がなされている。佐々木（2007）では、観光者のモチベーションから、旅行動機についての検討が行われている。また観光の目的地については、観光ルートではなく、観光地の持つ要素や属性からの分類を行っている。観光の目的地は「認知的特性」として観光者の心理の中で植え付けられ、観光者がその目的地を選択する際の「認知的魅力として合成される心理的な仕組みを明らかにする必要がある」⁹としている。

前田（2015）では観光行動の概念をまとめ、観光行動の分類や観光者の動機や志向について述べている。その中で観光ルートについては、訪日外国人旅行者の旅行ルートと日本人旅

行者の海外旅行の動向について触れている。世界各地から日本を訪れている訪日外国人の旅行ルートを調査した結果、東アジア地域内の往来については、訪問する国や地域が単一であることが多いのに対し、アメリカ、ヨーロッパなどの遠方からの旅行者については日本という単一国のみの来訪ではなく、東アジアの国や地域を複数周遊する傾向にあることを示している¹⁰。

佐々木（2007）、前田（2015）、については心理学的な側面からの研究が主体となっているため、観光ルートについて、観光者の動機や意識などの心理的側面からの分類が多岐にわたってなされているが、実際の観光者の“移動”について触れている部分は多くない。一方、橋本（2013）においては、観光回遊行動という章立てを行い、移動パターンを中心とした、観光行動の類型にかかわる既存研究の整理がなされている。本稿では、この橋本（2013）にて取り上げられた先行研究を中心として、観光者の移動パターンについて整理を行い、その特性について検証をおこなう。

2. 1. 居住地から観光地に行くまでの移動パターン

観光行動について、ワンダーラスト型とサンラスト型という呼称で分類をしたのがグレイ（1970）¹¹である。前田（2015）ではこの二つの分類について前者を「知識や見分を広める・体験するなどのために観光する」、後者を「やすらぎくつろぎを求め、“適当と思われるところ”へ一時的に移動する」と紹介している¹²。ワンダーラスト型は複数国を訪ねることが多いのに対し、サンラスト型は一つの国に留まるという点でいえば、周遊型観光と滞在型観光の2種類に分類できると言えよう。（表1）

表1 Gray(1970) ヨーロッパにおける観光実態による観光行動の分類

ワンダーラスト型	サンラスト型
知識や見分を広める、体験するなどのために観光する	やすらぎ、くつろぎを求め、“適当と思われるところ”へ一時的に移動する
周遊型	滞在型

出所 前田(2015) ,p73 を元に筆者作成

ルーら(1993)は観光旅行の類型として、訪問地数を単一箇所と複数個所の2種類、目的を単一目的と複数目的の2種類とに分け、それぞれを掛け合わせて4種類の類型化を行っている。その4種類は特化型、多目的型、多目的地型、複合型と分類されている¹³(表2)。周遊型や滞在型といった表現はなされていないが、特化型が滞在型にあたり、多目的地型、複合型が周遊型に相当すると橋本(2013)では述べられている。また、多目的型については、「マクロな視点で見ればある単一訪問地での滞在型の観光旅行であるが、より狭域スケールで見ると、宿泊施設を拠点として目的地内で何らかの移動パターンをとることになる¹⁴」とあり、滞在型からの発展の可能性について示唆している。

表2 Lueら(1993)による観光旅行の類型

		目的	
		単一目的	複数目的
訪問地数	単一か所	A:特化型	B:多目的型
	複数か所	C:多目的地型	D:複合型

出所 橋本(2013) ,p107

鈴木(1966)では、ラケット理論と呼ばれる理論を提唱している¹⁵。その中で距離と行動範囲・距離と頻度・距離と観光内容(観光対象)については、相互間の関係が深いと述べている。またそのうえで、「出発地となる居住地(自宅)から観光対象地域までの距離(基本距離)が長いと、観光する範囲が拡大される(図1)」としている。居住地と観光地との距離が遠くなるほど、周遊範囲が広がるというものである。その関係から、図2のように、基本距離が延びれば宿泊数も増えることも触れている¹⁶。逆に都市郊外の遊園地や、動物園や、海水浴場などのように、比較的単目的な観光内容については、観光客の誘致距離は短く、一点滞留の観光内容となる場合が多いとして、近距離の観光施設の場合は目的が少なくなり、単純往復が増加するともしている¹⁷。

図1 観光基本距離と観光行動圏の関係

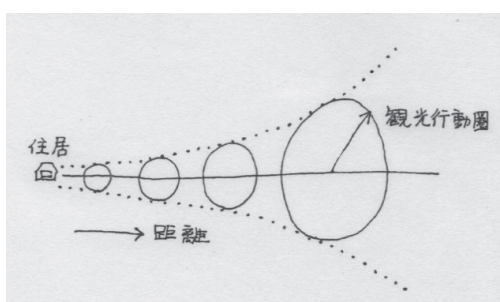
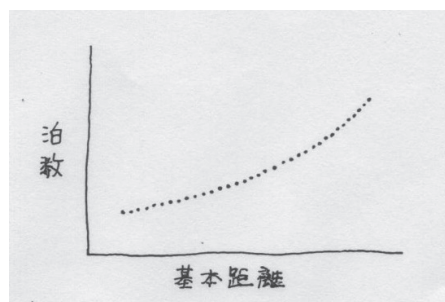


図2 観光基本距離と宿泊数の関係

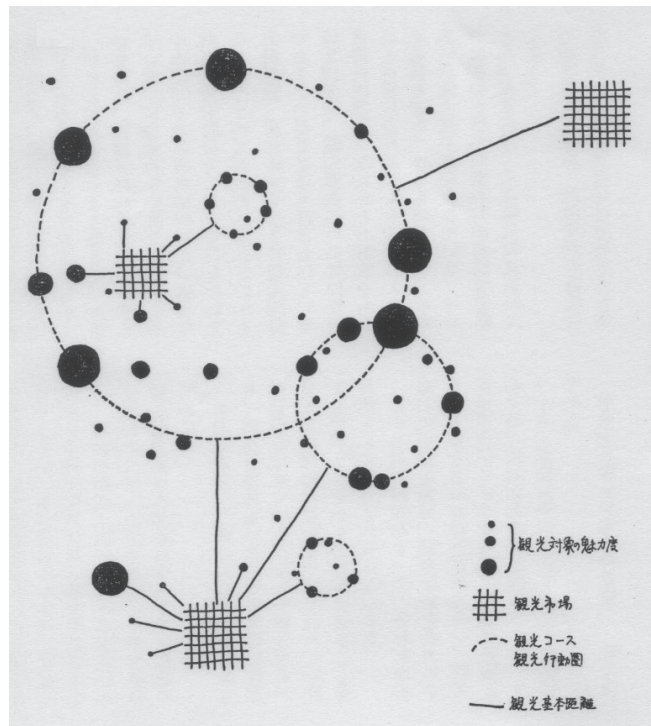


出所 図1、図2とも鈴木忠義(1966)「観光開発講座(3)観光開発の意味と観光の原理」『観光,9』,p.29

居住地と観光地との距離により行動圏が拡大され、逆に、居住地と観光地との距離とが近くなれば、周遊範囲が狭くなり、その狭くなった結果が、居住地と観光地との単純往復になると言えるであろう。ただし、グレイのサンラスト型でいえば、居住地と観光地との距離が遠いとしても、観光行動範囲が広がるというわけではない。この場合は、ルーらの分類によれば単一目的の単一箇所であるため、Aの特化型に属し、距離については考慮せずに、滞在型と認識するのが良いと考えられる。

また鈴木はこのラケット理論を提唱するにあたり、観光基本距離という、居住地から観光対象地域までの距離についての概念を定めている。この観光基本距離という概念は観光旅行者の行動について検討する際に、重要な要素となってくる。

図3 行動範囲・距離と頻度・距離と観光内容(観光対象)についての概念図(ラケット理論)



出所 鈴木忠義(1966)「観光開発講座(3)観光開発の意味と観光の原理」『観光,9』,p.30

キャンベル(1967)は都市に在住する者がレクリエーションや休暇を目的とした観光旅行をする際の行動パターンについて3つに分類を行った¹⁸。レクリエーションを目的とする場合は、居住地の近郊に存在するレクリエーションをおこなう地点への単純往復を行い、休暇を目的とする場合は、居住地から離れた複数のレクリエーションの地点に立ち寄りながら広範囲を移動する。そしてその中間に位置付けられる、ある地域へ移動し、そこを拠点として地域内を巡回するというものである。

このキャンベルの分類を元に、フロージェンフェルト(1999)は、観光旅行者を日帰り旅行、リゾート旅行、拠点型旅行、周遊型旅行の4タイプに分類している¹⁹。またミンとマシュー(1992)では、移動パターンを4つに分類し、往復型、ラケット型、大回遊型、フライ・ドライブ型としている²⁰。フライ・ドライブ型は観光旅行者が飛行機で観光地付近まで赴き、現地でレンタカーを利用して観光を行い、再度飛行機で戻るといったものである。筆者はこのフライ・ドライブ型については、レンタカーの移動範囲により、さらに分類がなされようとする。到着した観光地付近のみを回るのであれば、往復型もしくは域内回遊型に分類できるであろうし、観光地域あるいは複数の観光地域を周遊するものであるとしたら、ラケット型に分類することができるであろう。このように分類が分かれる可能性が発生したのは、フライ・ドライブ型が、唯一交通手段に基づいて観光行動を規定しようとしているからであると考えられる。

レクリエーションと観光は行動特性に違いがあるとしたのが、溝尾(1982)である。溝尾は旅行者の行動把握や資源に対応した観光地整備を正しくおこなうために、観光地をその資源の特性に応じて観光地（狭義）、レクリエーション地、宿泊地と三区区分する必要があると説いている。その中で、レクリエーション行動が往復行動をおこなうピストン型であるのに対し、観光行動は複数の観光対象地を巡る周遊型となるとしている。観光地は旅行者がスムーズに行動できるように多くの枝線を用意すること、レクリエーション地では、ピストン型になるため、道路の幅員と駐車場については、観光流動を想定した時よりも大きくとる必要があるとしている²¹。

またルーら(1993)は目的による類型だけではなく、観光行動の移動パターンとして、5つの分類を行っている。それは単一目的地型、立ち寄り型、拠点型、域内回遊型、大回遊型である²²。立ち寄り型は核となる目的地に向かっていく途中、寄り道をするような形でその行程上にある目的地にも時間を割くというものであり、拠点型は目的地を拠点として、そこから日帰り旅行を繰り返すというものである。

そして、オッペルマン(1995)ではルーらに加え、オープンジョー型と複数目的地域型を定義している²³。オープンジョーとは航空券で使われる用語であり、往復・周回航空券の往路と復路の発着地が片方あるいは両方とも異なる空港となる場合を指す。例えば日本からヨーロッパに向かう場合、成田空港を出発して、パリに到着し、復路はフランクフルトから戻るような場合が考えられる。オッペルマンの定義したオープンジョー型は、この航空券で使われる用語のとおり、往路と復路の発着地が片方あるいは両方とも異なる場合を表している。また複数目的地域型は、世界一周のような旅行を指し示している。これも全体的な行程から考えると、回遊型に分類できるのではないかと筆者は考える。

さらに橋本(1995)では、江戸後期の「お伊勢参り」の旅にみる行動特性について調査、分析をおこなっている。東国（東北・関東）発の一般的な参詣コースは大規模に回遊する形態がとられているのに対し、西国（四国・九州）発はラケット型のコースが一般的であったとしている。西国発がラケット型になっているのは、九州あるいは四国から関西までの往復は航路を利用するためであり、徒歩での移動部分については、参詣者が伊勢参詣を利用して、途上にできるだけ多くの観光をしようと一筆書きのルートが選択されているとしている。一筆書きはつまり同じ観光地を二度通らないという事であり、周遊ルートをとっていると言えよう。²⁴

2. 2. 観光地内における行動パターン

ここまでの先行研究は、観光旅行者が居住地から観光地に行くまで、あるいは一つの観光旅行全体の行程について類型化したものを取り上げているが、観光旅行者が観光地にたどり着いてからの行動パターンについての研究も行われている。

鈴木(1966)のラケット理論では居住地から観光目的地までの行動と同様のことが、観光地域や観光地でも行われるとされている。つまり、往復、周遊あるいはラケット状の行動が、観光行動全体だけでなく、個別の観光地域内や観光地内でも見られるということである。つまり観光地内での行動パターンについて検討することは、観光行動全体について考えることに繋がると言えるであろう。

ルーとマッカーシャー(2006)は、目的地である観光地での観光旅行者の動きを3つのパターンに分類した。線的移動型と回遊移動型、複合型の3種類である²⁵。線的移動型はさらに3分類される。宿泊施設を拠点として、複数の観光地やレクリエーションなどの目的地への往復を繰り返す単純往復。拠点となる施設から同じ目的地に何度も往復を繰り返す反復往復。目的地を繋ぎ合わせながら移動し、翌日は別の観光地域に向かう周遊移動である。回遊移動型は2分類される。観光地の域内を回遊する回遊型と、往復移動と回遊を組み合わせたラケット型である。そして複合型は2分類される。無秩序に移動をおこなうランダム型と、拠点とする宿泊施設から線的移動や回遊移動を重ねる放射状移動型である。

橋本(1993)では、岐阜県高山市を訪れた外国人観光客の行動について調査を行っている²⁶。高山市の観光対象の分布状況からエリアを6つに分け、その回遊順について調べた結果、8名の調査対象者のうち7名が周遊行動をとり、1名が傘型のような行動をとったとしている。傘型について筆者がその図を確認したところ、スタート地点である高山駅より、観光地が並ぶ川沿いまでまっすぐ歩き、その川を往復行動し、再び高山駅に戻るという行程であった。これは域内回遊型に分類できると考える。

さらに田中・和田(2005)においても、訪日外国人観光客と限定はしていないが、高山での観光客の歩行経路について分析している。その結果、回遊型、往復型、寄り道型、徘徊型、混合型の5タイプに分類を行っている²⁷。寄り道型は複数の目的地を重点的に辿るルートとされ、比較的立ち寄り型に近いと考えられる。徘徊型はある区域をくまなく散策するルートと定義している。混合型は、回遊型、往復型、寄り道型、徘徊型の4タイプの組み合わせとしている。

2. 3. 訪日外国人旅行者の行動パターン

訪日外国人旅行者についても、その観光ルートについての研究がなされている。奥山、毛塚、新井(2011)では、九州を訪れる訪日外国人旅行者の行動について、周回型と往復型とに分けている。この中で、団体旅行者では周回型が多い一方、個人旅行者では往復型が多い点について言及している²⁸。

張、澁谷(2013)では、中国北京からの訪日ツアーの商品について調査を行っている。これによればかなり長距離の移動を含む周遊型のツアーがある半面で、大都市圏周辺だけを周遊するものがあるとしている²⁹。これはルーらの分類によれば、大回遊型と域内周遊型にあた

ると言えるであろう。

2. 4. 先行研究からみられる観光旅行者の行動パターン

ここまで、居住地から観光地までの全体を含む行動パターンと、個別の観光地域や観光地内における行動パターンについての分類について先行研究を取り上げてきた。研究対象として、居住地から観光地までの全体を含む行動パターンと、観光地内における行動パターンは分類されている。しかし、鈴木のリケット理論にみられるように、一回の観光旅行者の行動全体を取り上げてみても、観光中にとられる回遊行動は入れ子のようになっており、観光地域や観光地など、それぞれの場面で同じように、回遊や往復行動が発生することが考えられる。つまり観光旅行者の行動パターンを考える際には、居住地から観光地に至るまでなのか、それとも観光地内なのかという事について、切り分けをする必要がないのではないかと筆者は考える。

上記の観点から、筆者はこれまでに挙げた観光旅行者の行動パターンについて、掲載した先行研究について、発生年順に一覧表を作成した(表3)。この観光行動の分類はルーら(1993)が行った、単一目的地型、立寄型、拠点型、域内回遊型、大回遊型の5種類に加え、鈴木

表3 観光行動の類型

	単一目的地型	立寄型	拠点型	域内回遊型	大回遊型	ラケット型	オーブンジョー型	複数目的地型	徘徊型
鈴木(1966)						○			
キャンベル(1967)	○			○	○				
グレイ(1970)	○				○				
ミンとマシュー(1992)	○				○	○			
ルーら(1993)	○	○	○	○	○				
橋本(1994)				○	○				
オッペルマン(1995)							○	○	
橋本(1995)					○	○			
フロージェンフェルト(1999)	○		○		○				
田中・和田(2005)	○	○			○				○
ルーとマッカーシャー(2006)	○				○	○		○	○
奥山、毛塚、新井(2011)	○				○				
張、澁谷(2013)				○	○				

筆者作成

(1966)の提唱するラケット型、さらにルーらに加える形でオッペルマン(1995)の提唱したオープンジョー型と複数目的地域型、そして田中・和田(2005)で定義された徘徊型を加え、合計9項目とした。これらの類型を各研究者の説と一致したものに○印をつけている。

まず単純に項目別の数を比較すると、単一目的型8、立ち寄り型2、拠点型2、域内回遊型4、大回遊型11、ラケット型4、オープンジョー型1、複数目的地域型2、徘徊型2、となっている。上記の一覧の中で、3名以上の研究者が同じ分類を行っているのは単一目的地型と域内回遊型、大回遊型、そしてラケット型となる。各々の先行研究により細分化された観光行動の類型ではあるが、大別をすれば、この4項目に集約できるのではないかと筆者は考える。

立ち寄り型は主たる目的地を設定し、他の副次的な目的地に立ち寄りながら、主たる目的地へ往復するというものである。主たる目的地に対して往復するという点では、行動パターンとしては単一目的地型に近いと言えるが、副次的とはいえ目的地が複数存在するという点では、大回遊型ともいえる。また拠点型は立ち寄り型でいうところの主目的地にまず訪れ、そこから副次的な目的地を複数訪れるというもので、こちらは単一目的地型の派生形ともいえるが、域内回遊型に分類するともいえる。

域内回遊型は、その目的とする行先が単一の観光地ではなく、ある程度の範囲がある観光地域となっている。そのため、観光地域を大きな枠で考えて、一つの目的地と認識した場合は、単一目的地型に類するともいえるが、個々の観光地をそれぞれ主要な観光地であると認識した場合には、周遊型になるともいえる。この範囲は鈴木(1966)による観光基本距離に関係している。居住地からの観光対象までの距離が長くなれば周遊範囲が広くなり、周遊型に分類をしたほうが相応しいかもしれない。また、居住地から観光対象までの距離が短くなれば周遊範囲が狭くなり、単一目的地型、あるいは往復型とみなすことができるかもしれないであろう。このようにどちらともとることができる域内回遊型は、やや中間的な立場にあると言えるであろう。

オープンジョー型は、前述したとおり、往路と復路の発着地が片方あるいは両方とも異なる場合を表している。観光の一連の行動が、居住地から出発して目的地を経て再び居住地に戻るとすれば、オープンジョー型といえども、結局は周回をして居住地に戻ることになる。周遊範囲が広い場合の区分として、周遊型とオープンジョー型、ラケット型は区別することが可能ではあるが、複数の観光地を連続して、一方通行の流れで巡るということは変わらない。変わる部分があるとすれば、ゲートウェイの数が1つなのか2つなのかという部分であろう。

また、複数目的地域型も、その例として世界一周が出されてはいるが、こちらも大回遊型と変わらないと言えると思う。そして、全てを通過していく周遊型のため、この場合はゲートウェイが存在しないという事になる。

3. 日本における観光ルートに対する取り組み

ここで、日本が訪日外国人旅行者に対する観光ルートについて取り組んできた経緯を確認する。1963年に制定された『観光基本法』³⁰には、「国際観光地及び国際観光ルートの総合的形成を図ること」³¹と記されている。そしてこの内容を受けて、1965年に観光対策連絡会議は『国際観光地および国際観光ルートの整備方針』を決定している³²。また、訪日観光交流倍増計画として運輸省により策定された訪日観光交流倍増計画（ウエルカムプラン21）により、1997年には『外国人観光旅客の来訪地域の多様化の促進による国際観光の振興に関する法律』（外客誘致法）³³が制定されている。その中で外国人観光客の促進のための計画の一つとして観光経路について触れられている。

これらのように、訪日外国人旅行者の来訪客促進について取り組む際には、観光ルートの策定がその計画の構成要素の一つとして取り入れられていることがわかる。

また、2007年に施行されている「観光立国推進基本法」³⁴に基づき策定された『観光立国推進基本計画』³⁵では、広域連携による観光振興の促進として、海外の観光地との競争に勝ち抜けるような観光魅力を創出するためには地域の魅力ある観光資源を広域的にネットワーク化することが重要であるとし、「テーマ型広域観光モデルルートの開発や広域連携による広報活動等、市町村や都道府県域を越えて地域が連携して行う観光振興の取組を促進する」³⁶としている。

2015年には観光庁が「世界に誇れる広域観光周遊ルート検討委員会」を設置、開催し、訪日外国人旅行者にとって魅力的なルートの形成のための理念、基本方針等を広く議論するための検討が行われた。そして同年に「広域観光周遊ルート形成促進事業」が実施され、テーマ性・ストーリー性を有する魅力ある観光地域をネットワーク化し、訪日外国人旅行者の滞在日数に合わせた広域観光周遊ルートを形成することにより、訪日外国人旅行者の周遊の促進による地域の活性化を図ることを目的として、広域観光周遊ルートの形成が計画された。2015年に7つの広域観光周遊ルートが認定され、モデルコースとして20コースが策定された。さらに翌年の2016年に追加募集が行われ、4つの広域観光周遊ルートと11のモデルコースが策定された。

本稿では、この合計31のモデルコースについて、前述した先行研究による観光ルートの分類と照らし合わせて、その構成についての検証をおこなう。そしてその結果、広域観光周遊ルートが観光ルートの分類としてはどの形が多いのか、また観光ルートの最重点市場としている国や地域によってその差があるのか検証していきたい。

4. 広域観光周遊ルートによる観光ルートの検証

前述したとおり、広域観光周遊ルートは11の地域でルートの形成計画がなされ、各地域が策定したモデルコースの総数は31に及ぶ。地域は日本全国を網羅しており、地域により実施

主体が単独のところもあれば、関西を中心とした「美の伝説ルート」のように、複数の連合体が実施主体となっているところも存在する(表4)。この31コースについて、筆者によるルート分類をおこなったものとコースが狙いとしている最重点市場、重点市場を一覧にしたものが(表5)である。

表4 広域観光周遊ルート形成促進事業 形成計画の概要と実施主体

広域観光周遊ルート形成計画の概要	実施主体
アジアの宝 悠久の自然美への道 ひがし北・海・道 Hokkaido - Route to Asian Natural Treasures	「プライムロードひがし北・海・道」 推進協議会
日本の奥の院・東北探訪ルート “Exploration to the Deep North of Japan”	東北観光推進機構
昇龍道 SHORYUDO	中央日本総合観光機構
美の伝説 THE FLOWER OF JAPAN, KANSAI	・関西広域連合・関西経済連合会 ・関西観光本部
せとうち・海の道 The Inland Sea, SETOUCHI	せとうち観光推進機構
スピリチュアルな島 ～四国遍路～ Spiritual Island ～SHIKOKU HENRO～	四国ツーリズム創造機構
温泉アイランド九州 広域観光周遊ルート Extensive sightseeing route of ‘Onsen Island’ Kyushu	九州観光推進機構
日本のでっぺん。きた北海道ルート。 Amazing Northernmost Japan, Hokkaido route	きた北海道広域観光周遊ルート 推進協議会
広域関東周遊ルート「東京圏大回廊」 The Wider Kanto Route “Around Tokyo”	関東観光広域連携事業 推進協議会
縁（えん）の道～山陰～ Route Romantique San'in	山陰インバウンド機構
Be.Okinawa 琉球列島周遊ルート “Visit Our Exciting Ryukyu Islands in The Pacific Ocean”	Be.Okinawa 琉球列島周遊ルート形成 推進協議会

観光庁・広域観光周遊ルートについて

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/kouikikankou.html> (2018年9月11日アクセス)

上記より筆者作成

表5 広域観光周遊ルート形成促進事業 ルート分類と最重点市場

	広域観光周遊ルート形成計画の概要	モデルコースの名称	ルート分類	最重点市場	重点市場	重点市場	重点市場
1	アジアの宝 悠久の自然美への道 ひがし北・海・道 Hokkaido - Route to Asian Natural Treasures	①. Explore the Wonderland in summer	大回遊型	台湾	香港	タイ	
2	アジアの宝 悠久の自然美への道 ひがし北・海・道 Hokkaido - Route to Asian Natural Treasures	②. Explore the Wonderland in winter	大回遊型	台湾	香港	タイ	
3	日本の奥の院・東北探訪ルート “Exploration to the Deep North of Japan”	①. 四季が織りなす東北の宝コース	大回遊型	北米	欧州	タイ	
4	日本の奥の院・東北探訪ルート “Exploration to the Deep North of Japan”	②. 三陸の恵みと復興コース	ラケット型	台湾	マレーシア	インドネシア	
5	日本の奥の院・東北探訪ルート “Exploration to the Deep North of Japan”	③. 日本海の美と伝統コース	オープンジョー型	タイ	北米	豪州	
6	昇龍道 SHORYUDO	①. Dragon コース《伝承空間への誘い》	オープンジョー型	中国	台湾	香港	
7	昇龍道 SHORYUDO	②. Nostalgic コース《「日本の心・ふるさと」お伊勢参りと世界遺産を巡る旅》	オープンジョー型	米国	欧州		
8	昇龍道 SHORYUDO	③. Great Nature コース《大自然の醍醐味アルペンと古代探訪の旅》	オープンジョー型	台湾	香港		
9	昇龍道 SHORYUDO	④. Ukiyo-e コース《サムライ文化・伝統技術リアル体験》	オープンジョー型	米国	欧州	タイ	
10	美の伝説 THE FLOWER OF JAPAN, KANSAI	①. KANSAI～世界遺産と絶景 伝統と自然の美の競演～ A Journey into the Kansai Legacies & Mother Nature	大回遊型	中国	タイ		

11	美の伝説 THE FLOWER OF JAPAN, KANSAI	②. KANSAI～日本の精神 文化の聖地 美の伝承～ A Journey into the Kansai Spiritual & Culture places	大回遊 型	欧州	北米		
12	せとうち・海の道 The Inland Sea, SETOUCHI	①. 新ゴールデンルート～ 新たな西日本発見の旅	オープ ンジョ ー型	台湾	中国	香港	タイ
13	せとうち・海の道 The Inland Sea, SETOUCHI	②. 歴史と芸術に出会う美 のルート	オープ ンジョ ー型	北米	欧州	豪州	韓国
14	せとうち・海の道 The Inland Sea, SETOUCHI	③. 空と島と海に溶け込む サイクリングルート	オープ ンジョ ー型	台湾	豪州	韓国	タイ
15	スピリチュアルな島 ～四国 遍路～ Spiritual Island ～SHIKOKU HENRO～	①. 四国スピリチュアル・ コース	オープ ンジョ ー型	欧州	米国	豪州	
16	スピリチュアルな島 ～四国 遍路～ Spiritual Island ～SHIKOKU HENRO～	②. 四国鉄道クラシカル・ コース	オープ ンジョ ー型	台湾	香港	中国	
17	スピリチュアルな島 ～四国 遍路～ Spiritual Island ～SHIKOKU HENRO～	③. 四国大自然ドライブ・ コース	オープ ンジョ ー型	台湾	香港		
18	温泉アイランド九州 広域観 光周遊ルート Extensive sightseeing route of ‘Onsen Island’ Kyushu	①. 鉄道・バスで廻る九州 の魅力満喫コース	大回遊 型	中国 (上海)	台湾	タイ	
19	温泉アイランド九州 広域観 光周遊ルート Extensive sightseeing route of ‘Onsen Island’ Kyushu	②. 九州の歴史・自然をレ ンタカーで廻るコース	大回遊 型	シンガ ポール	香港	韓国	
20	温泉アイランド九州 広域観 光周遊ルート Extensive sightseeing route of ‘Onsen Island’ Kyushu	③. 火山の島・九州一周コ ース	オープ ンジョ ー型	英国	フラ ンス	ドイ ツ	
21	日本のでっぺん。きた北海道 ルート。 Amazing Northernmost Japan, Hokkaido route	①. The Top of Japan - 夏	大回遊 型	台湾	香港	タイ	

22	日本のでっぺん。きた北海道ルート。 Amazing Northernmost Japan, Hokkaido route	②. The Top of Japan - 冬	オープンジョー型	台湾	香港	タイ	
23	日本のでっぺん。きた北海道ルート。 Amazing Northernmost Japan, Hokkaido route	③. The Top of Japan - 離島めぐり	立ち寄り型	台湾	香港	タイ	
24	広域関東周遊ルート「東京圏大回廊」 The Wider Kanto Route "Around Tokyo"	①. 自然大回廊（太平洋）コース	大回遊型	中国	台湾	香港	
25	広域関東周遊ルート「東京圏大回廊」 The Wider Kanto Route "Around Tokyo"	②. 自然大回廊（日本海）コース	大回遊型	米国	英国	フランス	豪州
26	広域関東周遊ルート「東京圏大回廊」 The Wider Kanto Route "Around Tokyo"	③. 江戸文化回廊コース	立ち寄り型	台湾	タイ	ベトナム	
27	縁（えん）の道～山陰～ Route Romantique San'in	①. 日本の原風景（世界遺産・日本遺産見聞録）	オープンジョー型	フランス	香港	台湾	
28	縁（えん）の道～山陰～ Route Romantique San'in	②. ジオパーク&ナショナルパーク・アクティビティ	オープンジョー型	香港	韓国	台湾	
29	Be.Okinawa 琉球列島周遊ルート "Visit Our Exciting Ryukyu Islands in The Pacific Ocean"	①. Gateway to Okinawa Lifestyle& Culture（人々の暮らしと琉球文化）	域内回遊型	米国	フランス	ドイツ	
30	Be.Okinawa 琉球列島周遊ルート "Visit Our Exciting Ryukyu Islands in The Pacific Ocean"	②. Secrets of Okinawa History（沖縄の歴史と琉球王国の誕生秘話）	域内回遊型	米国フランスドイツ	台湾		
31	Be.Okinawa 琉球列島周遊ルート "Visit Our Exciting Ryukyu Islands in The Pacific Ocean"	③. Wild Adventure of Okinawa Archipelago（五感で感じる沖縄の自然）	域内回遊型	米国ドイツフランス	台湾	香港	

観光庁・広域観光周遊ルートについて

<http://www.mlit.go.jp/kankoch/shisaku/kankochi/kouikikankou.html>（2018年9月11日アクセス）

上記より筆者作成

4. 1. 観光ルート分類についての検証

各広域観光周遊ルート形成計画は2~4のモデルコースを提示しており、合計31コースとなっている。この31コースを観光ルートの形に分類したところ、オープンジョー型が15コース、大回遊型が10コース、域内回遊型が3コース、立ち寄り型が2コース、ラケット型が1コースとなった。

オープンジョー型は四国や山陰、瀬戸内、昇龍道などに多くみられ、大回遊型は北海道や九州、そして関東と関西という地域に多くみられた。ゲートウェイである国際空港の規模が大きい地域では大回遊型によるコース設定がみられ、中国・四国地方や中部・北陸地方のように国際空港の規模があまり大きくない地域ではオープンジョー型によるコース設定が見られた。

また域内回遊型については、3コース全てが沖縄のコースであり、那覇を起点として離島を巡るという行程を取らざるを得ないという点で、このような結果となったと思われる。

そして立ち寄り型の2コースは北海道の離島めぐりと関東圏の複数個所を巡るコースであった。北海道の離島めぐりは、天売島と焼尻島の2島と利尻島、礼文島の2島の4島を巡るコースであり、それぞれ2島ずつは一度に訪れることができるものの、離れた場所にある2島ずつを1度に巡るコースにしたために、結果的に立ち寄り型とならざるを得なかったというコースである。また、関東圏のコースについては善光寺、軽井沢、草津、伊香保、桐生、益子、日光、鬼怒川、川越、秩父と、関東だけではなく、長野までを範囲として、さらに点在する観光地を強引に結び付けた感があるコースであった。

唯一のラケット型は東北の三陸を巡るコースである。一部立ち寄り型に近い部分もあるが、花巻から釜石に行き、三陸海岸沿いに八戸へ抜け、再び東京に戻るという行程は、ラケット型と言えるであろう。

4. 2. 最重点市場についての検証

広域観光周遊ルート形成計画のモデルコースについては、それぞれ最重点市場と重点市場が想定されて計画がなされている。最重点市場と重点市場は複数の地域や国が設定されている場合もあり、その数を挙げていくと(表6)の通りになる。

表 6 最重点市場とコース数

国または地域	最重点市場	重点市場
台湾	12	7
中国（上海含む）	4	2
香港	1	14
タイ	1	12
シンガポール	1	0
韓国	0	4
インドネシア	0	2
マレーシア	0	1
ベトナム	0	1
豪州	0	5
米国	6	1
北米	2	2
欧州	2	4
フランス	3	3
ドイツ	2	2
英国	1	1

観光庁・広域観光周遊ルートについて

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/kouikikankou.html>（2018年9月11日アクセス）

上記より筆者作成

最重点市場として一番多く対象とされているのは台湾の12コースであり、他の地域や国を引き離している。その次に多いのが米国の6コースで、北米の2コースと合わせると8コースとなる。中国はその次の3番目に位置し、4コースが対象となっている。他のアジアの国や地域は、香港、シンガポール、タイがそれぞれ1コースずつと、最重点市場としては重きを置かれていないことが伺える。しかし、重点市場としてはやはり重視をされており、香港で14コース、タイが12コース、台湾も7コースとなっている。

また、最重点市場と重点市場の関連性については、最重点市場が台湾の場合、重点市場が香港になるというように、アジアやヨーロッパといった、同一地域に設定されていることが多い。これは観光基本距離を近いものに合わせていると考えることができる。

5. まとめと今後の課題

先行研究を元に筆者は観光ルートについては4つに大別できるのではないかと検討した。それを踏まえて広域観光周遊ルートの観光ルートの分類を検証したところ、オープンジョー型、大回遊型、域内回遊型、立ち寄り型、ラケット型の5種類に分類することができた。筆者の分類に含まれていなかった立ち寄り型については、2コースとも離島を目的地とした観

光ルートであり、やや特殊性がある。そのため、離島を含む場合は立ち寄り型のコースになりやすいため、立ち寄り型は分類としても成立すると考えられる。

観光ルートの分類別の数については、オープンジョー型が最も多いものとなった。ゲートウェイとなる国際空港の規模があまり大きくない地域ではオープンジョー型によるコース設定が見られたが、これは観光ルートを地域振興のために活用するという意識の表れだと考えることができる。ゲートウェイとなる空港を分散化することは、主要空港の離発着数が飽和状態にある現状において、訪日外国人観光客4000万人を目指すために重要な観点だと言える。

オープンジョー型に次いで多かったのが大回遊型である。大回遊型は国際空港の規模が大きい地域でより多くみられ、実際の訪日外国人観光客の行動を反映したものだと考えられる。ただし、これは捉え方にもよるが、訪日外国人観光客が日本のみを旅行する場合には、日本を一つの観光地域と捉えた場合は、大回遊型ではなく、域内回遊型という事もできる。この分類については観光旅行者の発地と目的とする地域、観光地により区別が必要であり、今後検討を重ねていく必要があると考える。

最重点市場及び重点市場についての検証は、まずはやはりアジア地域を重点としている地域が多い事が挙げられる。そして、最重点市場と重点市場の関係性は、距離が近いもの同士が選ばれるという事が分かった。それ以外の特徴として強いてあげるとすれば、最重点市場として4コースが対象となっていた中国である。中国は大回遊型が3コースであるのに対し、オープンジョー型は1コースしか設定がされていなかった。基数が少ないため断言することはできないが、団体ツアーで来日するイメージが中国人観光客にあるため、大回遊型が選ばれたことが推測できる。それ以外にはルート分類と最重点市場の間には現時点では関連性を見出すことができなかった。そのため、観光ルートについて検討する際には、来訪者のターゲットを重視するのではなく、ルート分類について重視するほうが望ましいという事が考えられる。

今回の検証において、観光ルートについては先行研究により多くの分類がなされているが、おおむね5種類に大別できると考えられることが分かった。そして、観光ルートは、観光基本距離の近いもの同士がその対象として選ばれていることが分かった。今後、観光ルートについてインスタ・マーチャンダイジングの理論を用いて検討する際には、この5種類の観光ルートの分類を念頭におき、観光者の行動について捉えていく必要があると考えられる。

今後の課題としては、周遊の規模による分類の取り扱い方についての検証が必要であると考える。例えば訪日外国人観光客を考えた場合、成田空港から入国して、日本国内を周遊し、再び成田空港から出国する場合、観光客の全体の行動を見れば、ラケット型に分類されるが、日本国内のみの行動を取り上げてみれば回遊型に分類される。また、この観光客がディズニーランドのみを観光した場合は、往復型にもなりえ、そこから成田山や銚子などを訪れた場合は域内回遊型に分類されるであろう。

また、同様に成田空港から入国した観光客が日本国内を観光して福岡空港から出国した場合、観光客の全体の行動から見れば回遊型であるが、オープンジョー型ともいえる。さらには日本国内のみの移動を取り上げれば、立ち寄り型ということもできるであろう。

このように観光ルートについては、その形の種類はある程度の法則性が見られるが、そのコースがいずれかに分類されるかは、行動範囲と捉え方により左右されると考えられる。今後はこの範囲についての違いを明確にしていく必要があると考える。

注

- 1 鈴木忠義、毛塚宏、永井護、渡辺貴介(1984)『土木工学大系30 ケーススタディ 観光・レクリエーション計画』、彰国社,p.27.
- 2 加太宏邦(2008)「観光概念の再構成」『社会志林 Vol.54.4』法政大学,pp.27-62.
- 3 岡本伸之(2013)『観光経営学』朝倉書店,p.2.
- 4 田島義博(1989)『インストア・マーチャングデザイン』ビジネス社,pp.33-34.
- 5 財団法人流通経済研究所(2008)『インストア・マーチャングデザイン』日本経済新聞出版社
- 6 前田勇(2015)『観光とサービスの心理学〈第2版〉—観光行動学序説—』学文社,p.16.
- 7 注6と同じ,p.35.
- 8 橋本俊哉(2013)『観光学全集第4巻 観光行動論』原書房,p.105.
- 9 佐々木土師二 (2007)『観光旅行の心理学』北大路書房, p.99.
- 10 注6と同じ,pp.55-56.
- 11 Gray,H.P.(1970) *International Travel -International Trade*, Heath Lexington Books.
- 12 注6と同じ,p.73.
- 13 Chi-Chuan Lue, John L. Crompton, Daniel R. Fesenmaier(1993)「Conceptualization of multi-destination pleasure trips」*Annals of Tourism Research* Volume 20, Issue 2, Volume 20, pp..289-301
- 14 注8と同じ,p.107.
- 15 鈴木忠義(1966)「観光開発講座(3)観光開発の意味と観光の原理」『観光,9』,pp.29-32.
- 16 注15と同じ,p.29.
- 17 注15と同じ,p.30.
- 18 Campbell,C.K.(1967) “An Approach to Research in Recreational Geography,” B.C. Occasional Papers No.7 Vancouver University of British Columbia, pp.85-90.
- 19 Flogenfeldt, T. (1999) “Traveler Geographic Origin and Market Segmentation; the Multi Trip Destination Case,” *Journal of Travel and Tourism Marketing*, vol.8(1), pp.111-124.
- 20 Mings, R. C. and McHugh, K. E. (1992) “The Special Configuration of Travel to Yellowstone National park,” *Journal of Travel Research*, 30(4), pp.38-46.

- 21 溝尾良隆(1982)「観光地の類型化区分の必要性」『望ましい国内観光の実現のために』,内閣総理大臣官房審議室編,大蔵省印刷局,pp.57-59.
- 22 注11と同じ
- 23 Opperman M (1995) “A Model of Travel Itineraries,” Journal of Travel Research, 33(4), pp.57-61.
- 24 橋本俊哉(1995)「江戸後期の「お伊勢参り」の旅にみる行動特性－参宮日記の分析をもとに－」『応用社会学研究,37』立教大学社会学部 ,pp.61-75.
- 25 Lew,A and McKercher,B,(2006)” Modeling Tourist Movements; A Local Destination Analysis,” Annals of Tourism Research, vol33(2),pp.403-423.
- 26 橋本俊哉(1994)「徒歩スケールの観光回遊に関する研究 飛騨高山での外国人観光者の回遊実態の分析」『観光研究5』日本観光研究学会,pp.11-20.
- 27 田中智・和田章仁(2005)「観光客の回遊経路に関する考察－飛騨高山を事例として」福井工業大学紀要,35,pp.155-162.
- 28 奥山忠裕、毛塚宏、新井直樹(2012)「運輸政策コロキウムin九州 外国人観光客の動向と国際観光ルートの形成」,運輸政策研究機構,運輸政策研究14(4),pp.105-112.
- 29 張 娜 澁谷 鎮明(2013)「訪日パッケージツアー商品から見る華人観光客の訪問地と観光ルート」,中部大学国際関係学部,貿易風：中部大学国際関係学部論集 (8),pp.223-242.
- 30 『観光基本法』衆議院ホームページhttp://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/houritsu/04319630620107.htm (2018年9月9日アクセス)
- 31 注28 第二条二項
- 32 運輸省(1966)『運輸白書 昭和41年度』大蔵省印刷局,pp.475-477.
- 33 『外国人観光旅客の来訪地域の多様化の促進による国際観光の振興に関する法律』衆議院ホームページ http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/houritsu/14019970618091.htm (2018年9月9日アクセス)
- 34 『観光立国推進基本法』観光庁ホームページ <http://www.mlit.go.jp/common/000058547.pdf> (2018年9月9日アクセス)
- 35 『観光立国推進基本計画』国土交通省ホームページ <http://www.mlit.go.jp/common/001177992.pdf> (2018年9月9日アクセス)
- 36 国土交通省総合政策局観光政策課(2007)『観光立国推進基本計画』,p.10.

Considered about sightseeing route from the type of tourism behavior

HADA, Toshihisa

In this paper, we classify the "wide tourist round trip route" approved by Japan Tourism Agency based on previous research.

I think that the formulation of sightseeing routes is effective for guiding tourists to rural areas and bringing people and gold flow. Furthermore, when considering sightseeing routes, I am considering applying the theory of in-store merchandising.

According to previous studies so far, tourist routes are classified into nine categories, but the author broadly classifies them into four. And as a result of applying it to the "wide tourist round trip route", it turned out to be classified into 5, not 4. And it turned out that sightseeing routes were chosen as the target of sightseeing base distances close to each other.

As a future task, I think that it is necessary to verify how to handle classification by the scale of tourism.

Keywords : sightseeing route , Inbound , Round trip